Scott Straus,

The Order of Genocide : Race, Power, and War in Rwanda.

Ithaca : Cornell University Press, 2006, xiv＋273pp.

武内進一（たけうち しんいち）

はじめに

ルワンダのジェノサイドに関する重要な研究書が刊行された。今後，この問題に関する研究においては本書への言及が不可欠になるだろう。本書はまた，ジェノサイド研究や平和構築論全般に対しても重要な含意を有している。本書の主張は，今後多様な分野で取りあげられ議論を呼ぶことになろう。

1994年にルワンダで起こったジェノサイドは世界に深刻な衝撃を与えた。それには様々な理由があるが，なかでも特筆すべきは，数多くの民間人がジェノサイドに参加し，わずか100日足らずで50～100万人もの人々が殺戮された事実である。いったいなぜ，こうした事態が起こりえたのだろうか。ルワンダのジェノサイドに関しては既に幾多の研究が蓄積されてきた。それにより，殺戮が積年のエスニック集団間の憎悪に由来するものだ，といった誤った認識は正される傾向にある。しかし，なぜルワンダでは，大量の民間人がジェノサイドに参加したのか，なぜジェノサイドを主導した急進派がかくも大量の民間人の動員に成功しえたのか，という点については依然として解明されたとはいえない。

本書はこの問いに正面から答えようとする。その際，主として立脚するのはジェノサイドに参加した囚人たちを対象とした大規模な調査である。聞き取り調査で得た囚人たちの語りと統計分析に基づく本書の分析は，かなりの程度説得的であり，従来の認識を転換させる驚きに満ちている。以下では，本書の主張を要約して紹介し，その上で評価を述べることとしたい。

Ⅰ　内容の要約

本書の構成は以下のとおりである。

序　章
第１章　ジェノサイドの背景
第２章　全国レベル，地方レベルでのジェノサイド
第３章　地方におけるダイナミクス
第４章　ジェノシデール
第５章　犯罪者はなぜジェノサイドに参加したと説明するか
第６章　ジェノサイドの論理
第７章　暴力の歴史的パターン
第８章　ルワンダのリヴァイアサン
結　論

各章の内容をかいつまんで紹介する。序章では，著者の問題意識，調査方法，本書で展開される議論が整理して示される。この章は本書全体のコンパクトな要約としても読むことができる。ルワンダのジェノサイドに関する先行研究によって，それが盲目的な部族間の憎しみによって引き起こされたのではないことが明らかになった。しかし，先行研究では，ルワンダの歴史（特に植民地主義のインパクト）とエスニシティーの政治化，そして政治エリートの役割に主たる焦点が当てられる一方，なぜ権力維持の戦略としてジェノサイドが選択されたのか，なぜ大量の民間人が殺戮に参加したのか，といった点はあまり議論されてこなかった。本書の問題意識は，これらの問いに答えることにある。

著者はジェノサイドの展開過程を次のように仮説的に提示する。ハビャリマナ暗殺とそれに伴う内戦の再開，反政府ゲリラRPF（ルワンダ愛国戦線）の進軍という1994年４月６日以降の状況変化によって，ルワンダ全土は極端に不安定，不確実な状況に陥った。こうしたなか，政権を握っていたフトゥ急進派（Hutu hardliners）は，すべてのトゥチは敵だと宣

言する。危機的状況下において，この呼びかけは公認の政策となり，地方レベルの政治権力はこの政策を支持する勢力に簒奪されていった。そして彼らがトゥチ殺戮のために主導する大規模な大衆動員は，国家機構が地方レベルでも強力に機能し，国家による住民の動員が従来から実践され，地理的に逃げ場がないというルワンダ国家の特質によって可能になった。

以上の議論から得られる含意は次のようなものだ。第１に，ジェノサイドの実行者＝犯罪者は一般人と比べて特異なパーソナリティを有しているわけではない。彼らは「普通の人々」である。第２に，支配的なエリートの立場が危機的な状況において，ジェノサイドというラジカルな手段が選択された。ルワンダのジェノサイドは必ずしも綿密に計画されたものではない。第３に，国際社会による迅速な介入は，当事者の状況認識を変え，それによってラジカルな手段を選択するインセンティヴを喪失させるため，ジェノサイドの阻止に有効である。

第１章は序論的な性格を有する。先行研究の貢献と限界について整理された後，ジェノサイド直前のルワンダの政治状況が描かれ，内戦や政治的自由化が引き起こした危機的状況における急進派の対応がまとめられる。第２章では，ジェノサイドの展開とその地域差について分析される。ハビャリマナ暗殺に引き続く急進派の権力簒奪，そしてジェノサイドの過程が記述された後，州ごとのジェノサイドのパターンが統計的手法を用いて比較される。この分析から，ジェノサイドの開始時期に地域的差異が観察されるものの，いったん開始されると暴力の強度には差がないこと，ジェノサイドの開始時期の早さを説明するのに，政権与党であるMRND（開発国民革命運動）への支持の強さ，RPFの支配地域からの距離の近さといった要因は有意だが，所得の高さや失業率は有意でないことが示される。

第３章ではジェノサイドの展開過程が５つの地域で比較される。危機的状況下で国家権力を握った急進派は，敵とトゥチを同一視し，その殲滅を命じた。これにより，ローカルレベルで既存の政治秩序が崩れ，暴力を推進する勢力がフトゥ同士の権力闘争を制して地域の権力を握り，そこで虐殺を推進した。暴力の拡大は，事前の計画に沿って進行したというより，複数の臨界点を超えて爆発的に拡大したカスケード現象として理解すべきだと著者は主張する。

第４章では，著者がルワンダ全土の拘置所で実施した200名以上を対象とする聞き取り調査に基づいて，ジェノサイドに参加した人々（犯罪者）の社会的性格が分析される。なお，「ジェノシデール」（génocidaire）とは，ルワンダにおいて，「ジェノサイドに参加した者」の意で用いられる言葉である。分析から，全体としてみれば，犯罪者のプロフィールはフトゥ成人男子のそれと大差なく，「普通の人々」が殺人に動員されたといえる。ただし，著者の分析はそこで留まらない。犯罪者のプロフィールをより詳細に分析した結果，攻撃を指導した者たちに社会的ステータスの高い農村部エリート層が多いこと，特に暴力的な犯罪者には，若い，教育程度が低い，民兵に属している，といった社会的特徴が観察されることを明らかにしている。これにより，トゥチへの攻撃においては，農村エリートが率いる比較的小規模な暴力的集団という核が存在したことが理解できる。この小規模な集団が地方政治の権力を握り，ジェノサイドを遂行した結果，多くの「普通の人々」が動員されたのである。

第５章では人々が殺戮に参加した動機が分析される。分析の結果，トゥチに対する憎しみ（社会的距離），ラジオなどによるプロパガンダの影響，貧困などの要因は，いずれも動機として説明力が弱いことが判明する。動機として重要なのは，集団内の圧力と他集団に対する恐怖であった。参加を拒否すれば面倒なことになるという感情，またRPFに殺されるかも知れないという恐怖から，多くの人々がジェノサイドに加わったのである。他方，地方において暴力を主導した人々は，親族・姻族にトゥチがいないなどトゥチに対して社会的に疎遠であり，プロパガンダを信じる傾向にあったことが示される。

第６章では，犯罪者たちがどのようにジェノサイドへの参加を説明するか，彼らはなぜトゥチを殺さねばならないと考えたのかが検討される。証言から次の３つの主題が浮かび上がる。第１に戦争である。

ジェノサイドへの参加は，戦争による恐怖，怒り，復讐，自衛といった一連の論理によって説明される傾向にある。第２にエスニック集団をひとつのカテゴリーとして捉える認識である。ジェノサイドへの参加者は常にトゥチをひとつの集団として認識し，敵と同一視した。第３に権力による認可という考え方である。トゥチを殺すことは当局の承認を得た正当な行動だと認識されていた。

第７章では歴史分析が行われ，1994年のジェノサイドの際に機能したダイナミズムが過去においても存在したことが示される。1960～70年代においても，国家権力を握る政治エリートが，自らの権力が脅かされたと感じたとき，トゥチに対する暴力を行使している。ジェノサイドの発現における国家の役割は決定的だと著者は主張する。ルワンダ国家に対するこうした問題意識に基づいて，第８章ではジェノサイドにおける国家の役割について考察が深められる。急進派が短期間に巨大な大衆を動員できた理由について著者は次のような結論を下す。植民地化以前から国家としての長い歴史を有するルワンダでは統治システムは制度的な連続性を有している。特に，国家による労働力調達制度は植民地化以前から発達しており，植民地期に強化された。このようにルワンダ国家はもともと強い大衆動員能力を有しているが，それが稠密な人口と見通しのきく地理的条件によって強められ，さらに戦時という危機的状況のなかで巨大な力を獲得したのである。

結論では，本書の主張が整理された上で，そこから導かれる含意が提示される。ジェノサイドは支配的エリートの権力が崩落しつつあるときに起こりやすいこと，またジェノサイドはエスニック集団間の統合が進んだ社会で起こりやすいこと，といった興味深い理論的含意が示される。また本書の議論から導かれる実践的な含意として，エスニック集団間の紐帯を強め，信頼感を醸成するという平和構築の過程でしばしば採られる政策は，無意味とはいわないまでも不十分だと著者は主張する。ジェノサイドは，エスニック集団間の強い憎しみによって引き起こされるのではなく，その発現には支配的エリートによる権力行使という要因が強く作用するからである。

Ⅱ　評 価

冒頭に述べたように，本書はジェノサイド研究の貴重な成果であり，綿密な実証研究に基づいて多数の興味深い論点が提示されている。評者はなかでも，次の２点が重要な指摘だと考える。

第１に，大量の民間人のジェノサイドへの参加が，従来主張されてきたようなエスニックな憎しみ，プロパガンダ，あるいは貧困によるものではなく，同一集団内の圧力や異なる集団に対する恐怖に基づくという指摘である。トゥチを憎んでいたから，ラジオでプロパガンダを聞いたから，またトゥチの資産を奪いたいから虐殺に参加したのではなく，フトゥの有力者に参加を促され拒否できなかった，RPFの報復が恐ろしくてトゥチを攻撃したという説明は説得的である。評者もルワンダの拘置所でジェノサイドに関する聞き取り調査を実施した経験があるが，多くの容疑者が同様の説明をしていたことに強く印象づけられていた。同一集団内の圧力から大量の民間人が虐殺に参加したという議論は，Mironko（2004）などにもみられるが，本書ほど周到な統計的手法に基づいた主張はこれまでに例がない。

本書では，こうした主張が，現地調査のデータだけでなく，より広いジェノサイド研究との比較の上に位置づけられ，さらに説得力を増している。上記の主張は，ルワンダ研究の文脈では従来の議論を覆す印象を与えるが，ミルグラム（1980）やブラウニング（1997）など既存の研究成果とは整合的なのである。

第２に，ジェノサイドへの参加者を同質の集団と見なさず，その中核的グループの特質を浮かび上がらせたことである。第４章，第５章で農村部でのジェノサイドへの参加者の特質が分析されるが，そこではジェノサイドを主導した人々がいわゆる農村エリートであり，エスニックなプロパガンダを信じる傾向にあったこと，また最も暴力的だった犯罪者が若い，教育程度が低い，民兵組織に属しているなどの社会的特徴を有していたことが指摘されている。農村エリートが率いる比較的小規模の暴力的集団を

中心として農村部のジェノサイドが展開し，結果的に膨大な数の「普通の人々」を巻き込んでいったという指摘は重要である。この指摘は，ハビャリマナの暗殺後ルワンダ全土に急速にジェノサイドが広がったメカニズムを考える上で重要な糸口を提供することになろう。

本書を読み始めたとき，評者は引き込まれるような高揚と同時に，ある種の恐怖感を覚えた。自分がここ数年来おぼろげに考えていたことが統計的手法を交えて説得的に主張されていたからである。これまで考えてきたことはすべて本書に書かれてある，この問題に関して自分にはもう何もいうべきことがないのではないか。そんな気がしたのである。しかし，本書を通読したとき自分の考えと異なる議論を発見し少し安心した。以下，２点についてコメントしたい。

第１に，ジェノサイドに大量の民間人が参加した原因として本書が重視する，ルワンダの労働力調達制度に関する問題である。著者は，1994年に急進派が大量の動員に成功した理由として，急進派による国家権力の掌握が決定的に重要だと考える（この点は評者も同感である）。そして，ルワンダが強い大衆動員力を備えていた理由として，国家による労働力調達制度が植民地化以前から存在し，今日まで連続性があることを重視する。

評者は，この主張に疑問を感じる。著者が重視するウブレトゥワ（*uburetwa*）は土地をめぐる賦役であって，フトゥ農民が土地の権利保持者であるチーフに対して無償労働を提供する制度である。これは農民と地主の関係であって，国家による労働力動員制度とは言い難い。また，ウブレトゥワは植民地期に金納化され，独立後は廃止されている。国家による労働力動員としては，植民地期の強制的労働徴集制度の方が重要である。これはアカジ（*akazi*）と呼ばれ，道路建設や運搬などのために植民地当局の命令で労働者が徴発された。しかし，独立以降アカジは廃止されたし，ハビャリマナ政権期に行われた共同労働制度ウムガンダ（*umuganda*）は1974年に導入されたものにすぎない。つまり，ルワンダ国家の労働力調達制度は植民地期以降断続的に存在してきたものにすぎない。ジェノサイドにおける民間人の動員に関して，この制度をそれほど重視できないと評者は考える。

労働力調達制度の捉え方に関する評者の違和感は，ルワンダ国家の捉え方に関する違和感と結びついている。第２のコメントは，この点に関わる。著者は，ルワンダのジェノサイドにおける国家の役割を繰り返し強調する。しかしながら，農村部にジェノサイドが展開する過程での国家の役割は，実際のところ曖昧である。例えば，第３章において，地方レベルの暴力拡大過程が詳細に跡づけられるが，そこでは地方行政機構の長がしばしばジェノサイドに反対し，受動的な態度を取ったこと，そしてその場合には急進的な農村エリートが行政機構の長に代わってコミュニティの権力を握り，ジェノサイドを遂行したことが指摘されている。つまり，中央では急進派が国家権力を掌握していたが，地方では必ずしも国家機構がジェノサイドを推進したわけではないし，必ずしも国家機構を通じてジェノサイドの命令が伝達・実行されたのでもない。国家の役割が決定的だという著者の主張は，こうした事実関係との整合性を欠く。

この点を説得的に説明するためには，ルワンダの国家がいかなる性格を持つのか，それを政治学的にどのように特徴づけるのかといった点に関して議論を深める必要がある。本書では，この点に関する十分な議論がないまま国家の重要性だけが繰り返し指摘されるため議論に曖昧さが残るのである。評者は，ルワンダの国家権力がフォーマルな制度にではなくインフォーマルな人的ネットワークに立脚していたこと，そしてジェノサイドの指令がハビャリマナ政権末期に急成長した急進派勢力を通じて伝達され，彼らの存在は必ずしも国家機構と重なっていなかったことが，上述のような現象をもたらしたと考える。

国家権力のフォーマルな制度的基盤が弱く，むしろインフォーマルな人的ネットワークに依存していたことは，アフリカ国家の特質に関して従来からしばしば指摘されてきた。ハビャリマナ政権期のルワンダでも，その権力中枢は，大統領の親族を中心とした「アカズ」（*akazu*）と呼ばれる少数の集団に

独占されていた。1990年代に入りハビャリマナ政権は脆弱化したが，93年頃から野党内急進勢力が与党側の急進勢力と合流し，RPFに対して非妥協的態度を掲げる急進勢力連合（フトゥ・パワー）が成立する。ジェノサイドが地方へ展開する過程では，国家機構を通じてというより，中央の急進勢力との人的なつながりを通じて殺戮の指令が伝達されたと考えるべきである。急進勢力とのつながりを有する人々は，地方行政機構の長などフォーマルな国家機構に身を置いていた場合も多かったが，そうでないこともあった。ただし，こうしたネットワークを動員する上で中央の国家権力は決定的に重要であり，その意味で，ハビャリマナ暗殺後に急進派が国家権力を掌握したことは，ジェノサイドの急速な地方展開に決定的な意味を持ったのである［武内 2007］。

自分の研究の意義を確認するためもあって必要以上に批判が長くなったかも知れない。最後に本書の意義を再度確認しておきたい。膨大な数の民間人が殺戮に参加したことはルワンダのジェノサイドの顕著な特質である。その理由を考える上で本書がきわめて重要な貢献をなしたことは疑いない。ルワンダのジェノサイドに関する研究のみならず，ジェノサイド研究一般にとっても，本書は必読文献となろう。

文献リスト

＜日本語文献＞

武内進一 2007.「ルワンダのジェノサイドとハビャリマナ体制」佐藤章編『統治者と国家――アフリカの個人支配再考――』研究双書564　アジア経済研究所 223-275.

ブラウニング，クリストファー 1997.『普通の人びと――ホロコーストと第101警察予備大隊――』（谷喬夫訳）　筑摩書房.

ミルグラム，スタンレー 1980.『服従の心理――アイヒマン実験――』（岸田秀訳）　河出書房新社.

＜英語文献＞

Mironko, Charles K. 2004.“Social and Political Mechanisms of Mass Murder : An Analysis of the Perpetrators in the Rwandan Genocide.” Ph.D. diss., the Faculty of the Graduate School of Yale University.

（アジア経済研究所地域研究センター）